

# 「ギャル系」が意味するもの：〈女子高生〉をめぐるメディア環境と思春期女子のセルフイメージについて

佐藤（佐久間）りか

## ＜ キーワード ＞

思春期女子、女子高生、メディア、ジェンダー、イメージ、主体形成

## ＜ 要 旨 ＞

本稿は、マスメディアによって形成された“強く自由な主体”としての〈女子高生〉イメージが、同年代の少女たちのセルフ・イメージにどのような影響を及ぼしているのかを、1999～2000年に杉並区と浜松市で実施した質問紙調査とインタビュー調査の結果をもとに分析したものである。

少女たちは、マスメディアの〈女子高生〉イメージが、一部の「ギャル系」と呼ばれる少女たちによって代表されていると見ており、「女子高生＝ギャル系」「ギャル系＝援助交際」といった画一的・一面的な捉え方に不満を抱いている者が多い。しかし「ギャル系」の強さ、個性、仲間意識に対する肯定的な意見も多く、「ギャル系」に対する共感の存在も確認された。さらに今の時代に「女子高生であること」にどんなよい点があるかを聞いたところ、「自由気ままに楽しく、流行発信などを通じて社会に対して強い影響力を持てる」という回答が多く見られ、そうした“強く自由な”セルフ・イメージの背景に「ギャル系」への共感があることが示唆された。そこで「ギャル系」情報に特化した雑誌3誌の購読者を非購読者と比較したところ、「ギャル系」へのアイデンティフィケーションが強いと思われる購読者の方が、「女子高生であること」をより肯定的に捉える傾向があり、成人男性に声をかけられたり、お金で誘われたりする率も高く、援助交際をより普遍的な現象と捉えていることが明らかになった。

しかし、少女たちは自分たちが謳歌している自由や力を、高校時代だけの期限付きのものとして自覚しており、女性として真に“強く自由な”主体形成には必ずしもつながっていない。彼女たちに「今が人生で一番いいときであとは下り坂」と思わせてしまうジェンダーのありようを問題化していくためにも、これまで成人男性と思春期女子が作り上げてきた〈女子高生〉言説の生成装置に、成人女性がより積極的に介入していく必要がある。

## 1. はじめに

### 1-1 〈女子高生〉ブームと主体形成のプロセス

制服姿の少女たちがマスメディアの注目を浴びるようになってから、すでに10年近くになる。1993年の一連のブルセラショップ摘発報道に始まり、ルーズソックス、ミニスカート制服の流行、ポケベル・携帯

等の新しいコミュニケーションツールの取り入れ、プリクラの大ヒット、「チョコベリバ」などの新語の創出、そしてテレクラやツーショットダイヤルを介した「援助交際」と、思春期の女子、特に高校就学年齢の女子は、マスメディアに話題を提供しつづけてきた。バブル崩壊後、日本経済が低迷する中で、従来の価値観を

覆して邁進する〈女子高生〉のイメージは、マスメディアにおける一種のカンフル剤のような効果を果たしてきたようにも思える。<sup>1</sup>

そうした中でも、特に注目を集めてきたのが〈女子高生〉の性的能動性であろう。日常会話の中にすっかり定着した感のある「援助交際」という言葉が、たぶんに彼女たちのイメージを決定付けている。週刊誌のルポルタージュ記事では「あっけらかん」と売春行為について語る女子高生が紹介され、テレビの討論番組には「援助交際のどこが悪いのか?」と反論する少女たちが登場する。<sup>2</sup> 従来の、男性の欲望の対象物すなわち「客体」としての〈少女〉イメージではなく、自ら行動し、発言する性的な「主体」としての〈女子高生〉イメージがメディアを席卷しているのである。<sup>3</sup>

確かに高校生女子の性交経験率はここ10年余りの間に急速に伸びており、1987年には9%であったものが1999年には24%に達している[日本性教育協会1987-99]。このような急速な変化の背景には大きな価値観の転換があると考えざるを得ない。アメリカでは70年代にこれと似たような、10代女子の性交経験率の急速な上昇が起きた。15～17歳の都市部白人女性の性交経験率が1971年から1979年までの間に15%から32%へと倍増したのである[Alan Guttmacher Institute 1981 9]。このような急速な変化について、若者が成人するまでのライフコースのコホート研究を行なったModellは、フェミニズムの台頭、ベトナム戦争を契機とした若者たちの体制批判、Masters & Johnsonに代表される新しい性科学の登場等を背景とした、価値観の再編が基盤となっていると分析している[Modell 1989 263-325]。

しかし、90年代の日本における高校生女子の性行動の変容は、70年代のアメリカのような、若者の既存権力に対する挑戦の一端とは考えにくい。そこには世代間の価値観のぶつかりあいは見られない。そもそも援助交際自体が、大人の男性と思春期の少女という、異なる世代の共犯関係の上に成り立っているものなのである。もちろん援助交際が直接性交経験率を引き上げているわけではないが、性行為を「大人」の特権とし、「子供」(思春期の少年・少女も含め)にはそれを禁じる(と同時に「大人」の「子供」に対する性的欲望も封印する)という、従来の年齢規範が崩れてきていることが、援助交際、性交経験率の上昇、性的主体としての〈女子高生〉イメージの氾濫のすべてに共通す

る背景としてあるように思われる。援助交際の是非をめぐる「性の自己決定」についての議論を見ても、今日対立しているのは若者と大人の価値観ではなく、「若者の性のありよう」についての大人たちの異なった価値観であることは明らかである。<sup>4</sup>

このように価値観が揺れ動く中で、マスメディアは「自ら選び、行動する主体」としての〈女子高生〉イメージを構築し消費者に提供してきた。そうしたメディアの消費者の中には、当事者である女子高生や彼女らと同年代の少女たちも含まれる。福富らは、マスメディアが作り出した“女子高生ブランド”意識が、女子高校生の援助交際に対する許容的態度と有意に関連していることを明らかにしているが[福富 1998 172-174]、メディアが作り出す〈女子高生〉イメージは、援助交際だけでなくもっと広い意味でのセルフ・イメージとも関わっているはずである。果たしてメディアが作り出す「能動的な主体」のイメージを同年代の少女たちはどのように受けとめているのだろうか。また、そのようなイメージは、現実の世界での、彼女たちの主体形成のボキャブラリーとなり得るか。メディア・イメージとセルフ・イメージの間にはどのようなダイナミズムがあるのか。こうした疑問点について、1999年秋から2000年夏にかけて高校就学年齢の女子を対象に実施した調査の結果を踏まえて考察してみたい。

## 1-2 本調査の概略

本稿で用いるデータは、厚生省厚生科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業)を受けて、1998～2000年度の3年計画で実施された、「思春期女子に対する成人男性の視線と行動に関する研究」の中の質問紙調査とその回答者へのインタビュー調査から得られたものである。<sup>5</sup> 質問紙調査は、〈女子高生〉を性的商品として扱う社会環境を同世代の少女たちがどのように捉えているかについて、彼女たちの日常生活における見知らぬ成人男性との街中での接触経験と、メディアに描かれた〈女子高生〉イメージに対する意識の両面から探ろうとしたもので、1999年11～12月、東京都杉並区および静岡県浜松市において無作為抽出された高校就学年齢の女子2,000人を対象として質問紙を郵送し、それぞれ589名、512名から回答を得た。また、質問紙調査の際に「インタビューに答えてもよい」と答えた236名から、ある程度成人男性との接触が多い回答者を各地点6名ずつ選抜し、2000年8～9月にそ



それぞれ1時間から2時間半の面接によるインタビューを行なった。

その結果明らかになったのは、杉並・浜松どちらの地域でもおよそ5人に1人が金銭の提供を前提とした誘いを受けたことがあり、街中で大人の男性から「性的商品」として扱われる体験が、もはや首都圏の少女たちに限られたものではないということだった。但し、男性の視線に対する意識、声をかけられた際の受け止め方や「援助交際」の定義などについては有意な地域差が見出され、杉並の回答者のほうが「性的商品」として扱われることに慣れていてのではないかと、という考察が導かれた。一方、メディアに流通する〈女子高生〉イメージについては、9割近くがネガティブな印象を持っており、マスメディアの捉え方が画一的で表層的、一面的であることに強い不満を抱いていることが明らかになった。特に、一部の女子高生がやっているにすぎない援助交際とモラルの低下、たとえば「道徳心がない」「ふしだら」「お金に釣られやすい」「だらしない」といった評価を“いまどきの”女子高生の特性として一般化する報道を批判する意見が多かった。しかし、中には〈女子高生〉がメディアの中で「流行の発信者」として注目されることで「女子高生自体の価値や社会的地位が高まったように感じられる」という者もいることがわかった。

そこで以下では、こうした〈女子高生〉イメージの中核をなしていると思われる「ギャル系」について詳しく検討し(第2節)、さらにその「ギャル系」イメージとのアイデンティフィケーションが街中での男性との接触経験や援助交際に対する考え方とどのように関わっているのかを分析する(第3節)。

## 2. 突出する「ギャル系」

### 2-1 “いまどきの”〈女子高生〉のモデル

メディアの中の〈女子高生〉イメージに対する思春期女子の意識を探るにあたって、この調査ではまず自由記述形式の設問への回答やインタビューでの語りの質的分析を行なった。全体としては、上述したような傾向が見られたが、特に回答者が「マスコミで描かれる〈女子高生〉のイメージ」が、具体的にどのような女子高生をモデルとして作られているか、という点では、杉並と浜松では捉え方が微妙に異なっていた。「女子高生は東京にいるような人ばかりではない、他県ではかなり違うと思う」という意見に見ら

れるように、浜松では、マスメディアのイメージは“東京の”女子高生をモデルとしているので「自分たちとは違う」とみなす傾向がある。それに対し、杉並の回答者が「自分(たち)とは違う」という時は、それは「渋谷あたりに集まるほんの一部の女子高生」だから、と説明する人が多い。「マスコミで描かれる〈女子高生〉イメージのイヤなところ」を自由回答で挙げさせる設問では、実際にイヤなところを挙げた人の割合が杉並で93.4%、浜松で85.4%と、杉並の方が有意に高かったが( $p < 0.001$ )、これも杉並の回答者のほうが具体的に誰がどこでマスコミの取材を受けているかを知っていて、それが多分に誇張されたり歪められたりしたものであることを認識しているからかもしれない。

ところで、回答者たちが「渋谷に集まる女子高生」「東京の女子高生」というとき、具体的にはどんな女子高生を思い描いているのだろうか。回答者の語りの中でしばしば登場するのが「ギャル」「コギャル」などの言葉である。さらにこれに類するものとして、「ヤマンバ」「ガングロ」「日焼け」「髪白い」「厚底」などがある。これらのキーワードから、彼女たちがメディアの中の〈女子高生〉の典型として強く意識しているのが、俗に「ギャル系」と呼ばれるタイプの少女たちらしい、ということが見えてきた。

「ギャル系」とは、ルーズソックスとミニスカートの制服、さりげない茶髪という、比較的小ざれなく女子高生ファッションが一般化した中で、小麦色に日焼けした肌やカラーコンタクト、付け毛などを使ってより個性的に自分自身を演出することで、他との差別化を図ろうとする少女たちを指す。従来の女子高生が追求していた“かわいさ”に加えて、“目立つ”ということが重要なコンセプトとなっており、今回の調査が行われた1999年秋から2000年の夏にかけては、それを究極的に突きつめた「ヤマンバ」と称される一群が登場した。渋谷の109やセンター街周辺が発信源とされるこの一派は、ダーク系のファンデーションを使って顔を思い切り黒く塗り(「ガングロ」)、さらに白いアイシャドウや口紅を塗り、髪も極端に脱色してカールさせて大きく見せる(「ボンバーヘア」)という自己表現方法をとる。それに10cmを超すような厚い底のブーツやサンダル、スニーカーを履いて街を闊歩する彼女たちは、「ギャル系」のなかでももっとも突出した一派として、マスメディアの注目を集めた。<sup>6</sup> この調査が行われた時期は、「ギャル系」がまさにメデイ

アの〈女子高生〉イメージをリードする存在であったため、回答者がそれについて言及する際に、いい意味でも悪い意味でも何かと引き合いに出されることになったのだろう。

〈女子高生〉イメージのなかの「イヤなところ」で「ギャル系」が言及される場合、大きく分けて2通りのパターンがある。そもそも「ギャル系」とは独特のファッションで自己主張する少女たちを指す言葉であって、必ずしも援助交際や「プチ家出」などの世間から一般に“逸脱”とみなされる行為をする人とは限らないわけだが、マスメディアではそれを同一視する傾向がある（特に大人向けのメディアでは、ブルセラ報道以来〈女子高生〉の“性的逸脱”を誇張して描く傾向が見られる）。<sup>7</sup> したがってニュース番組や大人向け雑誌記事などの街頭インタビューや、バラエティ番組のキャラクターとして登場する「ギャル系」の少女たちが、自分たち女子高生の代表のように扱われることがイヤだという場合、「自分はそういうギャル系ではないので、ひとくくりにしないで欲しい」という意味と、「ギャル系だからといって援助交際などの“逸脱”行為をしているとは限らない」という意味の両方がある。「外見のみで判断するのはやめて欲しい。ガングロでもいい子はある」、「清纯系とギャル系を比較しないで欲しい。清纯系の奴らの方があぶない」、「ギャルにも幅があって何も考えてない子ばかりではない」、「ギャルの子たちは援交なんてしてない、そういうのは髪の毛黒い子のほうが多い」などの意見は後者の部類であり、「ギャル系」に親近感を抱いたり、自ら「ギャル系」を自認している場合などが考えられる。

一方、「女子高生＝ギャル＝強いて感じて、周りの人に一目置かれてる気がする」、「コギャルが強いというイメージがあるらしく、あまり、チカンされない」など、〈女子高生〉イメージのいいところとして「ギャル系」に言及するものも多い。また、「渋谷にいるような子は仲間意識が強くてコワイ」、「渋谷とかのギャルって堂々しすぎて感じがコワイですね」と、「ギャル系」に対しては「コワイ」という言葉がしばしば使われるが、それも必ずしも悪い意味ばかりではない。中には「いい意味で意識してない。なんか勇氣あるなあって感じ。なんか連帯感あって、友達がいれば何でもできる」（浜松のインタビューイ一の「egg」誌面に登場する東京の女子高生についての感想）といった意味合いもあり、「ギャル系」の少女たちの強い連帯感と

傍若無人ぶりに対する憧れもあるようだ。「自分では自分のことをギャルとは思っていないけど、そう思われても悪い気はしない」と述べた回答者などは、おそらく外見的にはギャル系ではないのだろうが、「ギャル系」の少女たちが持っていると思われる内面性に心を惹かれているのであろう。

「〈女子高生〉イメージのいいところ」（全体の4割弱が回答）として挙げられた記述を見て行くと、特に「ギャル」という言葉を使っていなくても、「ギャル系」を意識していたり、「ギャル系」にあてはめても違和感の無いものが多い。「世間のお騒がせ、注目的」「女子高生も進化してきた（ガン黒もいれば、ゴン黒もいる）個性で勝負している」「自由ほんばうに生活している」をはじめとして、「おしゃれで、かわいくて、自由で、受験勉強とか、親の期待にも拘束されないで…社会の『華』」などという記述もある。「ギャル系」について同世代の少女たちの間では、社会的“逸脱”（特に性的逸脱）と関連付けがちな大人向けのメディアとは、ちょっと違った受け止め方がされているようだ。

## 2-2 セルフ・イメージと「ギャル系」

次に、〈女子高生〉イメージが一種の性的な記号として氾濫する中で、思春期の少女たちはどのように自分たちを理解しているか（セルフ・イメージ）を探るために作った、「今の時代に『女子高生であること』にはどんなよい点があると思うか」という設問の自由記述欄を見てみよう。そこでは「ギャル系」に象徴される〈女子高生〉イメージのポジティブな特性（「強さ」「個性」「仲間意識」「傍若無人さ」など）は、そのまま回答者たちが今の時代に「女子高生であること」のメリットとして捉えている要素にもなっている。回答者全体の7割弱が「女子高生であること」のよい点を挙げているが、その中で、もっとも多く登場するのが「自由」とそれに関連した言葉（「好き勝手できる」「何でもやれる」「何にも縛られない」など）である。中には「ちょー自由！！やりたい放題！！」といった回答すらあり、「女子高生＝自由気まま」という図式が定着していることがわかる。

中には戦時中や親の世代と比べて“今の時代”の女子高生は自由であるという意味合いで言っている場合もあるが、多くの場合は「女子高生のときしか出来ないことがある」「女子高生ということで注目される、優遇される、ちやほやされる」「女子高生だからというこ



表1 マスコミで描かれる〈女子高生のイメージ〉および今の時代に「女子高生であること」のよい点  
(自由記述形式での回答からの抜粋)

	マスコミで描かれる 〈女子高生のイメージ〉のよい点	今の時代に 「女子高生であること」のよい点
キーワード	具体的回答	具体的回答
流行 先端 中心	流行はほとんど作ってるゾ。例) プリクラ、PHS、ルーズソックス、日サロ、ミニスカート(ひざ上15~25cm) / 流行ものはほとんどが、「女子高生に流行の…」と書かれてたり言われてたりするところ / 女子高生は楽しそう。女子高生は流行のセンタン / いろんな意味で(ファッションや流行など) 女子高生を中心に時代が回っていると思う / 女子高生がいろんなコトの中心だと言われているところ	流行の最先端をいくという意味では、不況の中にも明るさのようなものをもたらしているのではないと思う。現に女子高生を対象とした商品が一時的ではあるが、爆発的に売れる。その利益は大きいと思う / 世間の中心的存在。流行とかすべて女子高生からはじまっている / 女子高校が時代の中心のトコロ。行動しやすい
マスコミ 注目	マスコミが女子高生、女子高生と話題にし、「女子高生」というブランドになって、制服を着ているだけでちやほやされる / マスコミで話題にとりあげられているところに、なにか女子高生というものに価値観をおぼえる / テレビや雑誌が身近になった / かっよく特集されていると若いうちでやっぱいいなと思う / 高校生が目立って(注目されて) トクベツなかんじするとこ / 雑誌に一般の子ものせてもらえること / 女子高生が貴重っぽく扱われる	いろんな人の注目を集められる。みんな人にかまってもらいたいし、愛されたいと思ってるから。みんな孤独だけ「女子高生」というグループになれば、なんか守られている感じ… / 常に流行を生み出し、そのことによって注目され続けている点 / TVやマスコミ等で「女子高生」がとりあげられ、同年代の人がどんな風に考え生きているのか、知ることができるので、人生観も広がり、共感できる場所も増える
自由	けっこう自由に生きているところ / 自由ほんばうに生活しているところ / いろいろ自由に人生楽しんでますってかんじがイメージづいてるところ / 素直、やりたいことができる / 「今」という時を満喫している。おしゃれで、かわいくて、自由で、受験勉強とか、親の期待にも拘束されないで…社会の「華」。うらやましい / 女子高生はまわりの目を気にしないで、自由に自分の思ったことができる(ファッションに関して) / 自由に自分の好きな事だけをやって、楽しそう / 楽しそうだし、自由な感じがするところ / 女子高生にしかできないことを認めてくれる所 / 若いから許されることが多い気がする	何をやっても「女子高生だから」といってゆるされるような感じがする / 社会がなんでもあり、という感じなので、いろんなことを考えることができ、その時代が若いうちにきたことはとてもラッキーだと思う / なんでもできる。今しかできないこといっぱいしたいし、高校生ってあまくみられるけど、毎日パラダイス。遊びまくれるし。このまま高校生のままでいたい / 自由。何やっても「女子高生」というだけで許されるような所がある。優遇される / 若いから許されること、けっこうある。夜遊んでちょっと遅くなったりしても「今は〇〇したい年頃だもんね」と言われる / 20歳になってからではできないことができる
意志 意見 主張	自分の言いたいことややりたいことをして自分の意志を人に伝えているところ / 何かとチャラチャラして見えるけど、本当は自分の意志をしっかりと持っている / 思ったことをはっきり言うところ / 何をやるにも、こそこそしたりはしないから。自分の意見をはっきり言える / 自分の思った事はズバと言っているところ。	自由に行動できる。主張ができる / 仲間意識が強く友達がたくさん作れること。自分達の世界をつくりあげて、わけのわからない主張ができること / ある程度の世間の目をきにするこなく自分の意志をつらぬけること / 自己しゅちょうがいっぱいできる時代 / 言いたいことを言える / 明るくて誰とでも話せる
自分 個性 自信	自分というものをもっている。おしゃれ / 自分もっている / 個性が出ていていいと思う / 個性が出ている / 個性があるところ / 女子高生も進化してきた(ガン黒もいれば、ゴン黒もいる) 個性で勝負している / 自分自身にいい意味で自信を持っているところ。言う事はきちんと言うところ	自分の個性を人の目を気にすることなく表現できること。高校生らしい、といった日本人の枠にはまった思考を打ち破って、大人をぎゃふんと言わせていること / “自分らしさ”の表現ができる(昔の人にくらべて) / 個性が出せるようになったこと / 自分の個性を出す。たのしくすごせる
強い	強 / 女子高生 = ギャル = 強いって感じで、周りの人に一目置かれてる気がするところ / 強いと思われている。何かとしっかりとしている / ルーズソックスをはいたり、スカートが短くしていたりすると、テレビとかでギャルが強いというイメージがあるらしく、あまり、チカンされない	何にでも積極的になれる / 恐いもの無し、無敵 / 流行はいつも女子高生からだし、女子高生は強い。何でも言いたいことを言えるし、自由 / 時代の真ん中にいると思う。強気なイメージ / 流行やうわさに左右されない、強い自分を創れる気がする。
制服	制服着ると男のコがいっぱいナンパしてくる / 制服がかわいい	制服が着られるのは今だけだと思う。だから嬉しい。ナンチャッテ女子高生にはなりたくない / 制服着るだけでちょっと高い位置についてる気がするし、友達といれば街中で大声出したり、はずかしいこともできる

とで許される、甘えやわがままがきく」などのように、現代社会において女子高生は中学生や大学生、社会人に比べて自由だ、という意味合いで「自由」という言葉を使っている。「バイトができる」というのを挙げている回答者も複数いたが、自分の裁量で使えるお金があることが「自由」の重要な条件の一つなのだろう。しかも、大人と子どもの中間にいて、そうした自由を持ちつつも社会の保護も受けられる、と思っている。「失敗しても大目に見てもらえる」など、自己責任は負わないでも済むものとして自由を満喫しているわけだが、その自由があくまでも“期限付きの自由”であるということも彼女たちは承知しているのである。

「時代の先端、流行の発信源、流行を生み出す」など、自分たちが今まさに注目されている存在であることを意識した回答も多い。「流行はいつも女子高生からだし、女子高生は強い。何でも言いたいことを言えるし、自由」という回答を見ると、彼女たちの強さ、自己主張、自由の根拠が「流行の発信者である」ということにあることが分かる。マスメディアでの注目、女子高生をターゲットとした商品開発、店などでの女子高生に対する特典や優待制度から、自分たちは「社会の中心、時代の主役、社会的影響力が強い」といった、強気の発言へとつながって行く。

「世間の中心的存在。流行とかすべて女子高生からはじまっている」、「女子高生は毎日たのしいと思う。制服着てルーズはいて茶ばつしてれば男の子にモテモテだし、将来ふり返って90年代の女子高生が一番楽しかったと思うに違いない」、「流行はいつも女子高生からだし、女子高生は強い。何でも言いたいことを言えるし、自由」、「なんでもできる。今しかできないこといっぱいしたいし、高校生ってあまくみられるけど、毎日パラダイス。遊びまくれるし。このまま高校生のままでいたい」といった記述が延々と続き、ともかく圧倒される。思春期の女子がここまで自己肯定的であったことは、未だかつてないのではなかろうか。

もちろん回答の中には、今の時代に女子高生であることに、「よい点などない」「特にない」「むしろ悪い点のほうが多い」といった否定的な反応もある（この欄に何らかの記述があったうちの6.6%）。中にははっきりと女子高生に無制限の自由を与えてしまう社会、「何でもありの社会」は間違っている、と断ずる者もいる。「よい点」を挙げた回答者でも、強いて挙げるなら注目されていることによって得られる自信や期限つき

で与えられた自由や特権を挙げるしかない、ということとで回答したケースもあるだろう。とはいえ、やはり圧倒的に多数の回答者が、「強くて自由で個性的なく女子高生」というポジティブなセルフ・イメージを持っているのである。

不景気で社会が停滞する中で、マスメディアはここ数年、思春期の少女たちに「世間の常識やモラルに縛られずに、思いのままに生きることで社会をリードするく女子高生」という役割を演じることを期待してきたのではないか。「ギャル系」はまさにそれを体現しているキャラクターである。したがって、「ギャル系」というキャラクターをどのように読み解き、どこまでアイデンティファイするか、ということが、こんにちの思春期の少女たちがセルフ・イメージを構築する際の重要なポイントとなっているように思われる。それでは「ギャル系」へのアイデンティフィケーションの度合いは、街中での男性との接触経験や援助交際に対する考え方などと、どのように関連しているのだろうか。それを探るために、質問紙調査の中の購読雑誌に関する質問を利用して、量的な分析を行なった。

### 3. ギャル系雑誌の購読者分析

#### 3-1 ギャル系雑誌とは？

実は、女子高生の間には「ギャル系」以外に、「オネエ系」「B系」「ロリータ系」などなど、ファッションや音楽の好み等によって、いろいろなグルーピングがある。しかし、「ギャル系」がボリューム的にここまでの広がりを獲得した背景には、「ギャル系」のファッションや文化にフォーカスしたティーンズ向け雑誌の隆盛がある。その中のトップ3とも言えるのが、**「egg」** **「Pop teen」** **「Cawaii！」**の3誌である。<sup>8</sup>

今回の調査では、回答者に「よく読む雑誌」を自由回答形式で4誌まで挙げてもらった。その上位10誌を見てみると、穏健派であり個性の強くないファッション誌である**「non-no」**と**「プチセブン」**が1位、2位を占めている。しかし3位以下では、**「egg」**（3位）**「Pop teen」**（4位）**「Cawaii！」**（7位）と、「ギャル系」のファッションを取り上げた雑誌が入ってくる。これらの雑誌に共通するのは、読者モデルを多用し、街頭スナップを多く掲載することで、うまく現役女子高生の間での流行を拾い上げていることである。

これら「ギャル系」3誌のうちのどれかを読んでいる人は、残りの2誌のいずれかを併読する可能性が非



表2 よく読む雑誌の上位10誌 (N=1101)

	誌名	人数 (%)
1位	n o n - n o	399人 (36.2)
2位	プチセブン	230 (20.9)
3位	e g g	170 (15.4)
4位	Pop teen	163 (14.8)
5位	Seventeen	136 (12.4)
6位	Cutie	126 (11.4)
7位	Cawaii!	110 (9.9)
8位	Zipper	69 (6.3)
9位	a n a n	61 (5.5)
10位	V i V i	55 (5.0)
	無回答	121人 (11.0)

注) 太字がギャル系雑誌

常に高い。つまり、意識的に「ギャル系」の情報を集めようとする人が多いのである。むろん3誌の間でも、「Cawaii!」は化粧に関する情報が多いとか、「egg」は性的な情報が載っているなど、違いは少なからずあるが、ここではとりあえず3誌を一つのジャンルとしてまとめ、その購読者たち(3誌のうち1誌でも読んでいる人)の〈女子高生〉イメージに対する意識や街中での年長男性との接触経験について、何らかの傾向が見出せるかどうかを解析してみた。(以下、選択肢が3つ以上ある設問については表で示し、 $\chi^2$ 乗検定の結果は5%水準に\*印、1%水準に\*\*印、0.1%水準に\*\*\*印をそれぞれ付記した。複数回答の質問については、各選択肢ごとに購読雑誌による差の検定結果を示した。)

まず「egg」「Pop teen」「Cawaii!」の3誌のうちいずれか1冊でもよく読むと答えた人は、1101人中256人、23.3%であった。地域別に見てみると、杉並では回答者の19.4%がよく読むと答えているのに対し、浜松では27.7%と、明らかに浜松の方が高くなっている( $p < 0.01$ )。ギャル系雑誌購読者の中でみると、55.5%が浜松の回答者である。しかし、これは必ずしも浜松でギャル文化が隆盛を誇っているということの意味しない。浜松の回答者の場合、必ずしもこれらの雑誌のファッションや生活感覚に同一化して読んでいるわけではなく、「東京の女子高生はどうしているか」ということを知るための情報源として購読しているケースもあるからだ。インタビュー協力者の中にも、まったく見た目はギャル系ではないにもかかわらず

表3 ギャル系雑誌の併読状況

egg 読者 N=170		Pop teen 読者 N=163		Cawaii! 読者 N=110	
Pop teen	97人	egg	97人	egg	69人
Cawaii!	69	Cawaii!	67	Pop teen	67
プチセブン	32	東京ストリート ニュース	28	プチセブン	20

ず、「東京に住んでいる人」のファッションを知ることができるので、毎月必ず「egg」を購読しているという人がいた。一方、杉並では、自分の知合いが出ているかもしれない、ということで購読するケースが多いようだ。

### 3-2 〈女子高生〉イメージに対する認識の違い

〈女子高生〉イメージの「イヤだと思うところ」への回答率はどちらも9割弱で有意な差は見られなかったが、「いいところ」については、ギャル系雑誌購読者で45.3%、非購読者で36.1%と有意な差が得られた( $p < 0.01$ )。つまり、ギャル系雑誌の購読者は非購読者に比べて、〈女子高生〉イメージの「流行の先端を行っている」「世間の目に縛られずに自由気まま」「はっきりと自己主張する」といった側面をよりポジティブに捉える傾向があると考えられる。さらにギャル系購読者層では77.7%が「今の時代に『女子高生であること』のよい点」を挙げ、非購読者層の65.9%を大きく上回った( $p < 0.001$ )。これは、ギャル系の雑誌を読む子たちのほうが、〈女子高生〉というラベルを貼られることに抵抗感がないということであろう。

そこで制服にまつわる意識について見てみると、そもそもギャル系雑誌購読者には制服を着て学校に通っている人の比率が高い(ギャル系雑誌購読者93.8/非購読者82.1%、 $p < 0.001$ 。以下購読雑誌による比較はギャル系雑誌購読者/非購読者の順とする)。さらに制服を着て通学している人のうち、購読者は33.2%が「制服を着ていると男性の視線に違いを感じる」と

答えており、ギャル系雑誌を読まない人の24.9%を上回っていた( $p < 0.05$ )。やはり、制服姿の女子高生モデルがしばしば登場するギャル系雑誌の読者たちの方が、制服の持つ記号性にも敏感なようだ。

### 3-3 街中での年長男性との接触体験の違い

それでは、実際に街中で「オジサン(25歳以上と思われる男性)から声をかけられる頻度」はどうだろうか。ここでもギャル系雑誌購読者と、そうでない人たちの間に明らかな違いが見出された( $p < 0.001$ )。声をかけられることが「よくある」と答えたのは、非購読者では8.8%に過ぎないのに対し、ギャル系雑誌者では36.5%に上っている(「1~2回ある」については39.6/34.8%)。さらに、声をかけられたことがある人のうち「お金をあげるから」といわれたことがある」という人は、ギャル系雑誌を読む人では読まない人の倍以上の比率となった(56.5/27.7%,  $ps > 0.001$ )。

ギャル系雑誌の購読者が必ずしも「ギャル系ファッション」をしているとは限らないが、これほど大きな差が出るのは、やはり購読者には外見上の特徴があって、声をかける側がそういう子のほうが誘いやすいと思っているとか、ギャル系雑誌の購読者が男性から声をかけられやすい場所(繁華街や駅周辺、デパートなど)に足を運ぶ頻度が高い、といった理由が考えられる。また「声をかけられる」ことに慣れているギャル系雑誌購読者のほうが、お金の話が出るまで逃げ出さずに相手の話を聞いている、ということもあるだろう。

実際「今、オジサンから声をかけられたらどう感じるか」という質問に対して、「面白い」「楽しい」「うれしい」「得した、ラッキーだと思う」といった肯定的な反応を示すのは、ギャル系雑誌購読グループでは9%いるのに対し、非購読者グループでは5%にしか見られない( $p < 0.05$ )。また「今、オジサンから声をか

けられたらどうするか」という質問については、ギャル系雑誌購読グループでは「無視する」という回答が有意に多く(53.1%/44.7%)、逆に「逃げる」(7.4%/16.6%)という回答は少なかった( $p < 0.001$ )。「逃げる」という反応に比して「無視する」が多いというのは、そこには不安や驚きより、ある種の慣れがある、ということだろう。但し、こうした誘いに対して「つきあう」と答えたのはギャル系雑誌購読者でも2%に過ぎず、その割合は確かに非購読者(0.4%)よりは多いが、4人に3人が声をかけられ、4割強が「お金をあげるから」と言われていることを考えると、特に多い数字とも思えない。大人向けメディアに多い「ギャル系=援助交際」という構図がかなり誇張されたものであることが分かる。

### 3-4 「援助交際」に対する意識の違い

この調査では、大人向け雑誌の記事見出しに出てくるような女子高生イメージ(実際の雑誌記事をもとにして作っている)を回答者に提示して、その一般性について判断させるような質問を設けている。たとえば、「父親のような中年男性との『援助交際』で気軽に金を稼ぐ女子高生が急増中」という記事見出しを提示して、「自分の身の回り」と「社会全体」にわけて、どのくらいの割合でそういう女子高生がいるかを聞いているのだが、ギャル系雑誌の購読者では自分の身の回りに「たくさんいる」「1~2人いる」を合わせて40.2%となり、社会全体における割合についても「10人に1人」かそれより多い、とする回答が52.4%に上った。これが非購読者層では、自分の身の回りに「いる」と答えたのは16.6%、社会全体における割合では「100人に1人」というのがもっとも多く、10人に1人以上いると思っているのは38.8%であった。

さらにもう少し具体的に「援助交際=性的商品化」を意識させるように、性的な行為を意味する言葉や具体的な金額を入れた見出し、「大馬鹿者か、抜け目ない天使か。女子高生の心理。『パンチラ』1回5000円、『ウリ』なら2万5000円」の場合は、購読者/非購読者それぞれ、自分の身の回りに「たくさんいる」「1~2人いる」の合計が24.6/7.3%となり、社会全体では「10人に1人」かそれより多いとする人が45.6/28.3%と、より明確な差が出た(ともに $p < 0.001$ )。購読者の中でも自分が声をかけられたら「つきあう」と答えたのが2%に過ぎず、性的な行為を含む援助交

表4 今、オジサンから声をかけられたらどうするか

N (回答者数)	ギャル系雑誌購読者 (256)	非・ギャル系雑誌購読者 (845)
つきあう	2.0%	0.4%
ことわる	31.3	34.6
無視する	53.1	44.7
逃げる	7.4	16.6
その他	6.3	3.8

\*\*\*





表5 雑誌の記事見出し(A・B)に描かれた〈女子高生〉イメージについて  
 A「父親のような中年男性との『援助交際』で気軽に金を稼ぐ女子高生が急増中」  
 Aのような女子高生がまわりにいると思うか

N (回答者数)	ギャル系雑誌購読者 (256)	非・ギャル系雑誌購読者 (841)
たくさんいる	7.8%	1.0%
1～2人いる	32.4	15.6
いない	59.8	83.5

\*\*\*

Aのような女子高生が社会にどのくらいいると思うか

N (回答者数)	ギャル系雑誌購読者 (256)	非・ギャル系雑誌購読者 (838)
2人に1人くらいいる	1.6%	0.6%
5人に1人くらいいる	13.3	8.9
10人に1人くらいいる	37.5	28.8
100人に1人くらいいる	24.2	32.6
ほとんどいない	11.3	11.1
わからない	12.1	18.0

\*\*

B「大馬鹿者か、抜け目ない天使か。女子高生の心理『パンチラ』1回5000円、『ウリ』なら2万5000円」  
 Bのような女子高生がまわりにいると思うか

N (回答者数)	ギャル系雑誌購読者 (256)	非・ギャル系雑誌購読者 (843)
たくさんいる	3.9%	0.6%
1～2人いる	20.7	6.8
いない	75.4	92.8

\*\*\*

Bのような女子高生が社会にどのくらいいると思うか

N (回答者数)	ギャル系雑誌購読者 (254)	非・ギャル系雑誌購読者 (834)
2人に1人くらいいる	3.1%	1.3%
5人に1人くらいいる	10.6	6.0
10人に1人くらいいる	31.9	21.0
100人に1人くらいいる	29.5	31.3
ほとんどいない	11.8	18.5
わからない	13.0	21.9

\*\*\*

際をしている知り合いがいるのは25%に満たないのに、世間一般の話になると半数近くが10人に1人はそういうことをしていると思っているというのも興味深い。ギャル系雑誌3誌のうち「egg」には援助交際の体験者の発言がしばしば掲載されていることから、そういう情報が援助交際の一般性についての認識に関与しているのかもしれない。また、ギャル系雑誌では浜松の回答者が多いことから、地元ではそういうことがなくても「東京では」もっと活発に援助交際が行なわれているのではないかと考えている可能性もあるだろう。

このようにギャル系雑誌購読者は、〈女子高生〉イメージのポジティブな側面をより強く意識する傾向があり、しかも男性から声をかけられることも多く、援助交際をさほど珍しくもないものと考えがちである。それは自分たちが「社会の“華”」であるという認識が非購読者より強いということかもしれない。しかし、そのような認識はある意味で興味や関心の対象が「ギャル」的なものに集約されてしまっているがゆえの、過大評価である可能性もある。たとえば、質問紙調査の時点で高校3年で、インタビュー時点では大学生に

なっていた回答者は次のように語っている。

大学生になって思うのは、女子高生に興味あるのってやっぱり女子高生なんです。自分たちが自分の世代に興味あるから、それに影響され易い。今だったら女子大生の何かっていうほうがやっぱり気になる。だから女子高生のときはテレビとかでもそういう子が出ていと気になったけど、今は他人事。別世界。(杉並・18歳、インタビューより)

思春期の少女たちにとって、同世代の少女たちがモデルとして誌面を飾り、自分の考えを語っているギャル系雑誌は、自分たちの場所を確認するための重要な情報源である。しかもその購読者は複数のギャル系雑誌を併読する傾向にあり、〈女子高生〉についてのネガティブな話題を掲載するメディア（大人向けの雑誌やその記事を宣伝する車内吊りや新聞広告など）に接することが少ない。そういう意味では、やや無批判に自分たちの置かれた環境や日常を肯定してしまう傾向があるのかもしれない。

表6 「女子高生の援助交際や性」の話題を目にするメディアはどれか

N (回答者数)	ギャル系雑誌購読者 (256)	非・ギャル系雑誌購読者 (845)
若者向け雑誌で***	52.0%	35.9%
大人向け雑誌で	22.7	25.8
テレビで	92.2	93.1
新聞の記事で*	30.9	38.7
新聞の広告欄で**	8.6	17.0
電車や駅の広告**	13.7	22.4
その他*	9.4	5.7
あまり目にすることはない	1.5	4.0

#### 4. 考察

自分でも去年まではギャルだった。校則破って金髪のガングロで。今は違う。自分がやってることに馬鹿馬鹿しくなって。…(略)…これから未来もギャルのままじゃいられないし。だから戻ろうかなと。マスコミは女子高生ってだけでイメージを決めつけてるけど、確かにギャルの考え方が普通の子にもある。ギャルじゃなくてもブチ家出とか、親のお金を黙って取ったりとかあるし。ギャルの友達とかは自分たちが流行の先端というか、自分たちが中心って、思いあがりですけど、思っていましたね。やっぱ新種の生き物じゃないですか。注目されているって。(杉並・17歳。

インタビューより)

「ギャル系」と非「ギャル系」の境界は曖昧である。上記のインタビューイーが言うように、「金髪のガングロ」でなくても心は「ギャル系」という場合もある。「ギャル」というのは結局、こんにちの思春期の少女たちが自分たちに与えられていると感じる“自由と力”の象徴なのである。90年代を通してメディアは、女子高生に消費文化の新しいリーダー（主体）としての役割を期待して、“強く自由な”〈女子高生〉像を描きつづけてきた。ギャル系雑誌の購読者たちは、そうした〈女子高生〉イメージを支える価値観（自由であること、自己主張できること、个性的であること、注目を集めること）に、より強くアイデンティファイする少女たちである。彼女たちはそうした価値観をファッション（ガングロ、厚底靴）や行動（地べたに座り込むなど）を通じて表現しようとするわけだが、彼女たちに性的関心を抱く成人男性はそうした彼女たちの姿に反応して、声をかけるとかお金で誘うといった行動を取る。そのことによって、皆から求められ羨望されるような“強く自由な主体”としてのセルフ・イメージは一層強化されていく。そんな循環機構が、ギャル系雑誌の購読者分析から見えてくる。

20世紀最後の年を彩った「ヤマンバ」ファッションは、そうした強化の循環が行きついた果ての姿である。厚底靴とボンバーヘアでヤマンバ少女たちは軒並み身長170cm以上となり、「ガングロ」はさらに「ゴングロ」へと進化し、「プリテリ」（ぶりの照り焼きから）



図1 「プリテリ」(『egg』2000年3月号表紙より)

とあだ名される少女が雑誌の表紙を飾った(写真参照)。ここまで来るともうロリコン雑誌に出て来るような“カワイイ”制服少女の面影はどこにもない。むしろリップの時代のパルコの「鶯は誰にも媚びずホーホケキョ」というコピーがびったりだ。しかし、その

ヤマンバたちも1年ほどで姿を消し、美白ブームで少女たちの肌の色はすっかり大人しくなり、髪の色にも黒みが戻っている。外見上の「ギャル系」は次第に姿



を消しつつあるわけだが、心の「ギャル系」のほうはどうか。問題はバブル崩壊後の社会経済的な要請から作り上げられたと思しき“強く自由な主体”のイメージが、現実において少女たちの主体形成にどのように結びついているのか、ということだろう。

確かに、従来のような「清く正しく美しく」という処女幻想に縛られた少女たちに比べれば、今日のギャルたちは、フェミニズムが追い求めてきた性的主体性を実現したかのように見えるパワフルなペルソナである。<sup>9</sup> セックスワーク論の台頭もあって、自由売春の一形態である援助交際も、従来の性的搾取や女性の抑圧という文脈では捉えきれなくなっている。しかし、性的な能動性の獲得が直ちに性をめぐる権力装置からの「解放」を意味するわけではない。<sup>10</sup> むしろ、援助交際をめぐって産出される様々な言説の権力作用に絡めとられていく危険があるのではないか。「性の自己決定」の議論にしても、それ自体が従来は「責任能力のない客体」として扱われていた「子供（少女）」を“自己責任で判断し行動する主体”として再構築しようとするものであり、“強い主体”をめぐる物語を求めているメディアのニーズに合致していたからこそ、話題を呼んだのかもしれない。しかし、現実のギャルたちはどこまで主体的に「自己決定」を行なっているのだろうか？

「今しかできない」「大人になったらできない」「高校生だから許される」といった表現が今回の調査では繰り返し出てきた。回答者たちはあくまでも“期限付きの自由”を享受しているに過ぎないと自覚している。「女子高生であること」のよい点として、「ルーズをはけるのは今しかない」「制服が着られるのは今だけだから」など、制服や靴下にこだわった発言も少なくないが、それはこれらのアイテムが彼女たちの“免罪符”となって、さまざまな自由を確保してくれるからではないか。

例えば街で地面に座っていたり、みんなで大声で騒いだりしても（本当は許されないことだが）許される。イヤな顔をされたり、注意されたりはするけれど、大学生になったら自分に責任を持たなければならないが、今ならまだ甘えられる。（杉並・16歳、自由記述より）

「バイトで失敗しても許される」、「万引きしても若いから大目に見てもらえる」など、彼女たちの「強さ」や「自由」は「女子高生なら何をやっても許される」

という期限付きの社会の許容性に依存したものだ。しかも、彼女たちの多くは、自由な行動を容認する社会が自分たちを保護してくれることをも期待している。回答の中には「もし援助交際などをしたとしても、社会から守られている」という記述もあったが、近年多発しているテレクラ関連犯罪に見るように、「相手が女子高生なら何をやっても許される」と思っている大人たちもいることを彼女たちはどこまで認識しているのだろうか。このような“期限付きの主体性”に依拠して、彼女たちの「性の自己決定」を論ずることには不安を感じる。

〈女子高生〉に過剰な価値を付与する社会は、大人の女性に不当に低い価値しか認めない社会でもある。思春期の少女たちに「いまが人生で一番いいときであとは下り坂」というようなイメージを与えてしまうジェンダーのありようこそが問題化されなくてはならないだろう。そのためには、もっと大人の女性が援助交際や〈女子高生イメージ〉について、さらには自らの生と性のありようについて、発言することが必要なのではないだろうか。ギャル系雑誌「egg」の版元ミリオン出版が制服美少女ものを得意とするアダルト系出版社であるという事実が象徴しているように、〈女子高生〉をめぐる言説は、成人男性と思春期女子の間で交換され、循環することで増殖していく。〈女子高生〉について発言する成人女性は限られており、あちらこちらのメディアで同じ人物が発言を繰り返す傾向が見られる。<sup>11</sup> フェミニズムの視点からの援助交際に関する議論もあまり広がりが無い。<sup>12</sup> 期限付きでない「自由」や「個性」や「自己主張」について、大人の女性たちがもっと語り出さないと、心の「ギャル系」は再び沈黙してしまうのではなからうか。

最後に、こんにちの社会の矛盾を的確に突いた一人のギャル系雑誌購読者の発言を引用しよう。彼女には大人になってもこの「ギャル系」の心を捨てないで欲しい。

全国にたくさんいる女子高生の中で、ギャルっぽい格好したり路上にたまってるヤツらを見て、きたない、バカだ、品がないって、見た目だけで決めつけないでほしい。どんな格好したヤツだって、格好が似ててもみんな1人1人違う人間だから、考えや意見も違うし、見た目がすごいハデだって、中はホントは純粋なヤツもたくさんいる。ちゃんと人間対人間で生きてる。それはそれでしたいこと、したい格好してるだけ。別

にハヤリだから、流行の先端を行きたいからとかじゃないし、中には「売り」やって実際悪いことしてるヤツだってたくさんいるけど、それはそいつらもバカだけど、そんな社会を生んだ、そういうことを社会現象にまでした大人たちにも、十分責任はあると思う。いくら日本人の髪がパツキンがみとめられなくても、今だけしかない高校生という時期を、それぞれ生きてマス。(杉並・15歳、自由記述より)

#### 〈注〉

- 1) 本稿ではマスメディアに流通するイメージとしての〈女子高生〉をくくで括り、実社会における女子高生(高校に就学している女子)については括弧なしで表記する。
  - 2) 雑誌メディアによくある女子高生の語りを活かした「告白記事」については、本稿のもととなった「メディア情報が女性の健康に及ぼす影響に関する研究」(注5を参照)の第2部において、岡井崇之が詳しい分析を行っている。
  - 3) たとえば溢澤龍彦は「少女コレクション序説」と題した70年代のエッセーの中で「少女は一般に社会的にも性的にも無知であり、無垢であり、小鳥や犬のように、主体的には語り出さない純粋客体、玩弄物的な存在をシンボライズしている」と述べている[溢澤 1994 317]。また、80年代の一連の少女論(本田ほか 1998 などはその代表的な例である)においても、同様の〈少女〉イメージが取り上げられている。
  - 4) 援助交際を「性の自己決定」という観点から論じた著作の代表的なものとして、宮台真司他による『〈性の自己決定〉原論～援助交際・売買春・子供の性』[宮台ほか 1998]がある。それに対する反論として、小谷野 1998、永田 1998、永田 2001 などがある。
  - 5) この研究は「生涯を通じた女性の健康づくりに関する研究」(主任研究者:樋口恵子)の分担研究「メディア情報が女性の健康に及ぼす影響に関する研究」の一環として行なわれたもので、分担研究者である村松泰子のもと、佐藤(佐久間)りか、苫米地伸、辻泉、花田智弘、岡井崇之、久保田京、平野亜矢が研究協力者として参加した。ここでは、思春期女子の意識と経験に関する実証的研究と大人向け雑誌における〈女子高生〉関連記事分析を並行して行なったが、本稿で取り上げた質問紙およびインタビュー調査の実施および一次分析は、特に辻、花田の協力を得て行なった。なお、調査及び記事分析の詳細については1998年度『厚生科学研究(子ども家庭総合研究事業)報告書』(第2/6)、1999年度同報告書(第2/6)および2000年度同報告書(第5/7)を参照されたい。
  - 6) ヤマンバの新聞報道の例として、泉麻人「山姥」1999年11月27日付『朝日新聞』東京夕刊5面、藤本義一「ガングロ・ヤマンバ、純な目」2001年5月1日付『朝日新聞』東京夕刊7面、「ガングロ3兄弟ウィズユー 個性発信」1999年12月24日付『読売新聞』東京朝刊21面、
- 「輪っ SAY」『ガングロ』『ヤマンバ』2000年1月30日『毎日新聞』地方版/東京など。
- 7) 大人向け雑誌の〈女子高生〉報道において「性的逸脱行為」に関心が集中していることについては、注5の研究の第2部、花田智弘の論考に詳しい。
  - 8) 『egg』はミリオン出版、95年創刊。『Pop teen』は角川春樹事務所、80年創刊。『Cawaii!』は主婦の友社、96年創刊。
  - 9) 牟田和恵もヤマンバたちのファッションが従来のステレオタイプとは違う自己定義を作り出していることを評価している[牟田 2001 200-202]。
  - 10) 「性を肯定すれば権力を否定することになる、などとは考えないことだ。そうではなくて反対に、性的欲望という全般的な装置の脈絡を追うのである」[Foucault 1976: 訳 198-199]、「この装置の皮肉は、そこに我々の『解放』がかかっていると信じ込ませることだ」[同前: 訳 202]。
  - 11) 〈女子高生〉記事の書き手の性別について、やはり注5の研究の第2部で久保田京が分析を行なっており、女性では速水由紀子、家田荘子、香山リカなど一部の書き手が繰返し執筆していることが明らかにされている。
  - 12) フェミニズムによる援助交際の捉え方について論じたものとしては、宮台 1998、上野 1999 などがある。

#### 〈引用文献〉

- Alan Guttmacher Institute. 1981 *Teenage Pregnancy: The Problem That Hasn't Gone Away*. Alan Guttmacher Institute.
- 福富護 (研究代表者) 1998 報告書『「援助交際」に対する女子高生の意識と背景要因』(財)女性のためのアジア平和国民基金。
- Foucault, Michel. 1976. *La Volonté de savoir (Volume 1 de Histoire de la Sexualité)*. Éditions Gallimard. (渡辺守章訳 1986 『性の歴史 I 知への意志』新潮社)。
- 本田和子ほか 1988 『少女論』青弓社。
- 小谷野敦 1998 「娘たちよ、蔑視される覚悟があるか」『論座』1998.4: pp.28-31.
- 宮台真司ほか 1998 『〈性の自己決定〉原論～援助交際・売買春・子供の性』紀伊国屋書店。
- Modell, John. 1989 *Into One's Own: From Youth to Adulthood in the United States 1920-1975*. University of California Press.
- 牟田和恵 2001 『実践するフェミニズム』岩波書店。
- 永田えり子 1998 「買春男性の『再生産責任』を免除する理由ない」『論座』1998. 4: pp.44-47.
- 永田えり子 2001 「『性的自己決定権』批判——リベタリアニズム vs フェミニズム——」江原由美子編『フェミニズムとリベラリズム——フェミニズムの主張5』勁草書房。
- 日本性教育協会 1987-1999 『青少年の性行動——わが国の中学生・高校生・大学生に関する調査報告』第3～5回。



- 澁澤龍彦 1994 『澁澤龍彦全集』第12巻 河出書房新社。  
上野千鶴子 1999 「〈対談〉援助交際は売春か？」 Sexual  
Rights Project 編『買春解体新書：近代の性規範  
からいかに抜け出すか』 柘植書房新社

(さとう(さくま)・りか

プリンストン大学大学院社会科学博士課程)